

<神の元へ追いやられる>

マルコ 3 : 7 ~ 12

「人間の側の要求を満たすものであれば、宗教はいつでも歓迎される。しかしキリスト教の本質は、人間の思いを満足させることにあるのではなく、神の意志を重じ、これを第一にすることにある。これを伝えると、多くの人々はキリストのもとを去って行く」

イエス様の福音宣教は、いよいよ最盛期。しかし・・・
宣教の働きが広がると、正比例するように律法学者との対立が深まっていった。

「安息日にしてよいのは、善を行うことなのか、それとも悪を行うことなのか。いのちを救うことなのか、それとも殺すことなのか」と言われた。彼らは黙っていた。 マルコ 3 : 4

イエス様の言葉が彼らの急所にあたる！

答えることが出来ないパリサイ人。何故なら、神の基準から外れた自分の基準を握っていたから。神を神と出来ない。これが問題だった。

◆パリサイ人はヘロデ党と結託し、イエス様を亡き者とする陰謀を画策する。

【パリサイ人】

律法に熱心で妥協しないユダヤ教の原理主義者
ローマの権力に媚びることは神への背信行為と考える
反ローマ主義者
自分達が教え守ってきた律法を、覆す言動をとるイエスキリストが邪魔。

【ヘロデ党】

ヘロデ王家の一族。ユダヤ人ではなく、イドマヤ人。(旧約聖書：エドム人の子孫)
ローマの権力を後ろ盾にして、ユダヤの王家の地位に成り上がった
親ローマ主義者
統治する領土内で力を増すイエスキリストの影響力が、政治的に心配の種となる

宗教的指導者と政治的指導者の利害関係が一致。
イエスをどのようにして葬り去ろうかと相談を始めた。マルコ 3 : 6

◆罪の本質・・・自己中心。これが厄介。

自分の人生から神を閉め出そうとする。それが自己中心という罪。

すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくじりに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。

ヨハネ 1 : 9 ~ 12

「しかし」ということばに救われる！

この「しかし」がパリサイ人達にはなかった。最後まで受け入れず、イエス様を十字架に付けた。

◆押し寄せる大勢の群衆を、イエス様はどのような思いで見ておられたのだろうか？ イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやされた。また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかみそりに思われた。 マタイ 9 : 35、36

しかしこの群衆が、やがてイエス様を十字架に架ける側の者となる！ イエス様は、自分を求めてくる人々の後の姿までを分かった上で、一人ひとりにご自分を与えられた。

◆イエス様が捜しておられるのは、ただ「パン」を求めて押しかけてくる者たちではなく、神のみことばを慕い求める者たち。
わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は
どんなどきにも、決して渇くことはありません。 ヨハネ 6 : 35

「いのちのパン」を与えるために、この地に人として来られたから。

病気に悩む人々たちがみなイエスに触ろうとして、みもとに押しかけた。【10節】

病気・・・鞭打ち、災難、疫病、神から人間に与えられた苦しみを表す言葉。

「苦しみ」から神の元へ追いやられてきた人々が受けたものは？

パン？ それとも いのちのパン？

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。詩篇 119 : 71、72